

大学レベルに達していない音大生をどう教えるか？

アンドレ・アンリやダヴィッド・ゲリエを育てた名教師が見た日本

リヨン国立高等音楽院名誉教授

ピエール・デュト

「トランペットの世界観だけでなく、人生までも間違いなく変えてしまう」とアンドレ・アンリ氏が絶賛するフランスの名教師。国からトランペット教師育成のトップに任命され、世界各国でマスタークラスを行っている氏が日本の金管楽器教育についてさまざまなアドバイスを送る。

記事協賛：ヤマハ株式会社 撮影：佐藤佳穂

Pierre Dutot

PROFILE

パリ国立高等音楽院でルードヴィック・ヴァイヨンに学び1等賞で卒業。体育学や心理学も学び、学位を持つ。リヨン国立管弦楽団ソロ・トランペット奏者を経てリヨン国立高等音楽院の教授を22年間つとめ、アンドレ・アンリ(1996年ジュネーブ国際コンクール優勝)やダヴィッド・ゲリエ(2003年ミュンヘン国際コンクール優勝)など多くの人材を育てた。国内外のコンクールの審査員をたびたび務め、世界各国でマスタークラスを行っている。現在、リヨン国立高等音楽院名誉教授、ホルダー地方音楽院の国際音楽アカデミー客員教授、プラスアンサンブル・エキサゴーズ主宰。

——今回、各地で行っていらっしゃるマスタークラスは、すでに大変な評判を呼んでいます。来日してまだ1週間、日本の学生たちの印象をお聞きするのは少し早いですか？

デュト いえ、印象はもうはっきりしています。みなさん若くて真面目、一所懸命に練習し、精神力も強い人たちが多いのは素晴らしいと感じました。同時に、音大の学生たちの中に、テクニックが未熟で大学レベルに達していない人が多かったことにもちょっと驚きました。

なにか、最初のところで間違いがあるのではないのでしょうか？ 日本では学校のバンドで管楽器を始めますが、バンドの指導者はそれぞれの楽器指導の専門家ではない。そこに問題が生じるのだと思います。フランスには学校バンドというものはありませんでしたが、最近になって日本と同じように各学校で吹奏楽を取り入れようという動きが始まりました。しかし日本と大きく違う点は、各学校に楽器を指導できる人材を置くようにしていることです。

最初に適切な指導が行われないと、欠点を抱えたまま音大に入って来る生徒が多くなる。これは提案ですが、音大に入る前に、少なくとも1年ぐらいは準備期間を設けるべきではないでしょうか。

——基礎が間違っていたり方々で教えられているということですか？

デュト 間違っているというよりは、そもそも基礎が教えられていないケースが多いのではないですか。何事も最初が大

切です。始まりがきちんとしていれば欠点は直せますが、それを教える人がいないことには始まりません。

スポーツと同じですよ。私は25歳でテニスを真面目に始めようと思ひ、ラケットを持って友達と一緒に練習しました。しかし、すぐにこんなやり方では上手くなれるはずがないと思ひ、テニスの先生の所に習いに行つた。そこであるな欠点を直され、それから楽しく練習出来るようになりました。スポーツも音楽も、最初に欠点があると、コツを掴んで要領良く上達することは出来ません。要領が良くないと、良い結果は出ない。結果が出なければ楽しくならない。楽器でも、テクニック的な心地良さが感じられてこそ、音楽する喜びを感じることが出来るんです。

——ご自身、そうした初歩の子供を教えることもあるのですか？

デュト はい。偉い先生ほどレベルの高い学生を教えるという考えはフランスにもありますが、私はそれは全く逆だと考えます。リヨン国立高等音楽院で教えながら、私は初心者も教えました。初心者が抱える問題点を知ることが、レベルの高い人たちの欠点を知る上でも重要なことです。

演奏に役立つからだの振動のさせ方がある

——デュトさんなりの楽器への導入のし方があるのでしょうか？

デュト 幸い私は4年間大学でスポーツを学び、指導した経験があります。解剖

音大に入る前に1年間ほどテクニックの基礎に専念する準備期間が必要では？

9月に来日。国立音大、東京音大、相愛大、日本トランペット協会(ヤマハ銀座ビル)などでマスタークラスを行ったほか、10月8日には第4回関西トランペット協会フェスティバル(伊丹アイフオニックホール)にゲスト出演し、レクチャーとコンサート(共演：アンドレ・アンリ氏)を行った。